

「歴史教育の盲点」

ブルース・L・バートン

1996年11月20日放送

今回は日本の歴史教育について考えたいと思います。私は、ご覧のとおり外国人ですが、専門は日本史でして、この数年、日本の大学で歴史をずっと教えてきました。その経験を通して、日本人学生がもっております自国の歴史に対する見方や認識について、そしてその認識を作ったであろう日本の教育制度について、色々学ぶことができました。

今回は、日本史を中心として、歴史教育がなぜ必要なのか、今の教育制度のどこに問題があるのか、そしてそれを克服するためにどのような改善策が考えられるのか、などについて考えたいと思います。

まず、歴史教育の必要性について。なぜ若い人たちは歴史を知らなければならないでしょうか。

この問題を考えるに当たって、日本の高等学校で実際使われている日本史の教科書を見ましたが、その本の序説に、次のような文章がありました。つまり、「時は今も刻々と流れており、それにしたがって人も社会も流動し変化している。そのなかで私達がいかに生きるかを考える手がかりになるのは、これまで人間の歴史がどのように推移し、先人がそこでどのような努力をかさねてきたかということである。それを学ばせてくれるのが歴史である。」と、こう書いてありました。

要するに、歴史教育は、我々が生きている現代を理解するためにも、そしてこれから歩まなければならない道を考えるためにも不可欠だ、ということです。言い換えれば、歴史教育は広い意味で、我々の実生活に何らかの形で役立ってこそ意味があるということになりましょう。この点に関しては私も同感です。

では、日本の中学校や高校などで行われている歴史教育は、こうした意味で本来の目的を果たしているのでしょうか。残念ながら、大学生を見る限りでは、あまり果たしているとは思われません。

あらかじめお断りしておきたいのですが、これは先生達がちゃんと教えていないという意味ではないし、学生達が勉強していないという意味でもありません。先生方が大変努力していることはよく分りますし、学生も授業や受験勉強で色々な情報を身に付けており、大学生になると、例えば、同年齢のアメリカ人学生よりはるかに多くの歴史知識を持っています。

この点について、学生達が使っている教科書を見ても納得が行きます。例えば、先ほど触れた日本史の教科書は、300頁を越える、かなり分厚い本ですが、本文やそれに伴う資料・地図などにまったく無駄がなく、驚くほどの情報が詰まっています。もちろん隅から隅まで全部覚える学生はいないかも知れませんが、その一部を覚えるだけでもかなりの歴史知識をマスターすることになります。情報をきめ細かく覚えるという意味では、日本の

歴史教育は高く評価されるに違いありません。

問題は、学生が大変なエネルギーを費やして習得した知識が、知識だけで終わり、広い意味での理解にはなっていない、ということです。歴史上の出来事を若い人たちに教えるのも大切ですが、その事実が何を意味するのか、現代人としてどう考え、何を学びとるのか、ということはもっと大切ではないかと思います。

ところが今の歴史教育にはそういう観点があまり重視されておりません。教科書を見ても分かるように、より多くの情報を学生たちに伝えるのに必死でその情報の意味について述べる余裕は全くないのです。

例えば、我々現代人として深く知るべき、そして考えるべき事件の一つである原爆の投下について、高校生用の日本史の教科書には二行足らずの文章と一枚の写真しか見あたりません。これだけで若い人たちは原爆投下の意味をきちんと理解できるのでしょうか。恐らく理解できないでしょう。

歴史教育の目的が、受験のための豆知識を詰め込む、というのであれば、これでいいかも知れません。しかし、学生の理解力を養うことが目的であれば、本当に重要な出来事の意味や意義を伝えなければなりません。もちろん重要な事件ほど色々な解釈や考え方があるかも知れませんが、それを知るのも重要ではないでしょうか。本当の歴史は暗記するものではなく考えるものだと、私は思います。

以上は「詰め込み教育」の弊害の一面ですが、これと関連して、実際に学校で行われている歴史の授業の進め方そのものにも、考えていただきたい点があります。それは、新しい出来事より古い出来事の方が相対的に重視されている、という点です。教科書には、近代・現代の歴史も詳しく記載されていますが、学生の話を書きますと、実際の授業では、時間がなくなって明治以降のことはほとんど習わなかった、ということをよく耳にします。必ず古い時代からはじめる上、各時代ごとに教えなければならないことが多すぎるために、どうしてもこう言う結果になってしまいます。

しかし、歴史教育が現代を理解するための鍵だとすれば、現代日本の基礎が集中的に作られた明治以降こそ肝心なのではないでしょうか。私自身、奈良・平安時代を専門としておりますので、少し言い辛いのですが、古いことしか教えない歴史教育は本当の歴史教育にはならないと思います。

もちろん若い人たちは、日本史とか世界史といった歴史の授業以外に、近代や現代の出来事を知る機会がないわけではありません。政治経済の授業などで習うことができますし、家族や近所の人から話を聞くことができますし、マスコミを通して知ることもできます。

ただ実際問題として、古い時代のことを知っているのに明治以降の歴史が分からない学生が多いことは事実です。これは大変大きな問題ではないでしょうか。繰り返しになりますが、歴史に対する理解が、現在や将来に対する理解にもつながります。日本の将来を背負っていく世代が、20世紀の歴史を知らなくて、いかにしてこの国を21世紀に導いていくのでしょうか。若干気になります。

このように、日本の歴史教育は、高く評価できる点もありますが、学生の理解力が十分に育たなかったり、近・現代の歴史が比較的軽視されるなど、問題点も少なくありません。これはいずれも、情報を詰め込むことに重点を置き過ぎているからではないかと思われます。

こうした傾向は、歴史教育に限らず、日本の教育制度全体に根ざす大きな問題ですから、簡単に解決することは難しいでしょう。細かい知識ばかりを要求する受験制度とも密接にかかわっていますから、なおさらのことです。こうした受験制度がある以上、根本的な解決はみられないのではないかと思います。

ですから、最終的にはカリキュラム・教材・指導要領はもちろんのこと、受験のあり方も根本的に見直す必要がありますが、取りあえずは、我々教育に携わっているものが、問題点をしっかり見据えつつ、地道な努力を重ねていくべきでしょう。授業の中身を許容される範囲内で改善していくとともに、受験内容を少しずつ変えていくことも大切です。大学の受験などに、広い意味で理解を要求する問題や、近・現代の歴史を題材にした問題を増やしていけば、ある程度効果があるのではないかと思います。

では。